

## 新たな一歩を踏み出す



日本語教育研究センター所長 小林ミナ

### 1. はじめに

早稲田大学は、日本の中で、最も早く外国人学生にその門戸を開いた大学の一つです。記録には、1893年（明治26年）に、朝鮮半島から初めての海外留学生を受け入れたとあります。その後、現在に至るまで、外国人留学生の受け入れは本学の最重要課題の一つであり、「Waseda Vision 150」では、2032年の外国人留学生数として、「1万人（全学生の20%）」という数値目標が設定されています。ちなみに、本学に在籍する外国人留学生は96か国4415名（2013年5月1日時点）であり、日本国内の大学として最多人数となっています。

本稿では、日本語教育研究センター（Center for Japanese Language, 以下「CJL」）の紀要第2号刊行にあたり、CJLの役割と課題を確認するとともに、2014年度に向けて行った日本語カリキュラムの整理、再編について、その概要を記したいと思います。

### 2. CJLの沿革

CJLは、本学におけるすべての日本語教育を一元的に担っている学内機関です。1988年に語学教育研究所（当時）から日本語教育部門が独立し、2013年には設立25周年を迎えました。2009年からは、大学院日本語教育研究科と共に国際学術院に位置づけられてきましたが、2011年4月に全学的な研究教育センターとなり、国際学術院、日本語教育研究科を離れて、新たな一歩を踏み出すことになりました。

### 3. CJLの教育活動

CJLが担う事業には、「教育活動」「研究活動」「広報活動」「学内外他箇所への協力」の4つがありますが、その中心は「教育活動」です。「教育活動」の中で最も大きな比重を

占めているのは、「日本語教育プログラムの開設、運営」と「外国人留学生のための日本語科目の開講」の2つです。

### 3-1. 「日本語教育プログラムの開設、運営」

「日本語教育プログラム（Japanese Language Program, 以下「JLP」）は、別科日本語専修課程（2013年4月から新規学生募集停止）の後継プログラムとして2013年4月に開設されました。JLPの学生はCJLを本属として、日本語科目を中心に、13単位（半年間）、あるいは、26単位（1年間）以上の科目を履修します。

CJLでは、2013年度春学期に226名（別科生含む）、同秋学期に341名のJLP学生を受け入れました（在籍者総数）。2014年度春学期には、これまでで最多の403名の受入を予定しています。

### 3-2. 「外国人留学生のための日本語科目の開講」

CJLでは、週あたり651コマ（2013年度秋学期実績、以下同）の日本語授業を開講しており、上に述べたJLP学生341名を含む81か国1851名が、651コマの日本語授業を履修しています。ここで注意しなければいけないのは、「外国人留学生のための日本語科目」と言いながらも、1851名の履修生の1割弱にあたる161名が日本人学生だということです。言うまでもなく「外国人留学生」「日本人学生」というのは、国籍や在留資格による区分。外国人か日本人かという国籍と、「日本語学習を必要としているか」「日本語授業を履修するか」といった状況は、必ずしも一致しないということです。「日本語授業は外国人留学生のためのもの」「日本人学生には日本語学習は不要」といった単純な図式では語れない環境が、学内においても展開していることがわかります。

651コマの日本語授業を担当しているのは、CJLの専任教員（任期付）6名、非常勤講師71名、常勤インストラクター9名、非常勤インストラクター109名、兼任センター員（＝日本語教育研究科専任教員）11名という、5つの職階、計206名のティーチングスタッフです。一つの大学内の機関として、これだけの開講コマ、ティーチングスタッフを擁した日本語教育環境は、国内最大規模であることは言うまでもありません。

## 4. CJLの課題

2. で述べたように、CJLは2011年4月から全学的な研究教育センターとして位置づけられ、新たな一歩を踏み出すことになりました。

新生CJLにおける喫緊の課題の一つに、外国人留学生の受入れが質と量の両面においてますます加速することが見込まれる、本学の現状への対応があります。「Waseda Vision 150」において、2032年における外国人留学生数に「1万人」という数値目標が設定されたことは既に述べましたが、「1万人」の内訳は、必ずしもこれまでの枠組みに収まる留学生ばかりではありません。留学の期間、目的、進路その他さまざまな面において、多様な学生たちであることが予想されます。そのような現状を踏まえて、日本語教育の中長期的なグランドデザインを描くこと。これがまず一つの課題です。

その際、留意すべきことは何か。一つ明らかなのは、「外国人留学生数が2.5倍になるなら、教員も教室も予算も2.5倍必要である」といったような、数の増加に数で答える処方箋では、うまく対応できないだろうということです。こんな簡単なかけ算であれば小学生でもできますし、なにより、このような処方箋からは、日本語教育の専門家集団としての知恵は見えてきません。さまざまな目的、期待、希望を抱いて本学にやってくる学生たちにとっては、留学生活における日本語、日本語学習の必要性や優先順位もさまざまです。そのような学生たちに、CJLとしてどのような日本語学習環境を整えることができるのか。新生CJLは、今まさにそれを問われています。

一つめの課題が、「外国人留学生への対応」という、いわば狭義の日本語教育に関わるものであるとすれば、二つめにあげられるのは、「日本語教育学の知見、成果を、いかに全学の教育に還元するか」といった、広義の日本語教育に関わる課題です。

「日本語授業は外国人留学生のためのもの」「日本人学生には日本語学習は不要」という単純な図式では語れない環境がすでに出現していることは上で述べました。しかし、日本人学生だけに目を向けたとしても、「日本語学習が必要なのは誰か」を突きつめて考えていくと、その境目はきわめて曖昧なものとなります。そして、その先には「日本語学習／日本語教育とは何か」「日本語が使えるとはどういうことか」「何のために言葉を学ぶのか」といった、「言葉」や「言葉の教育」全体に関わる大きな課題があり、そこに収斂されていくであろうことも明白です。このような大きな課題に対して、CJLに何ができるのか。これはすなわち、「外国人留学生のための」という狭義の日本語教育にとどまることなく、日本語、日本語教育の専門家集団として全学の教育カリキュラムに対して発信、提案していくということではないでしょうか。そしてこれもまた、CJLの責務であると考えます。

## 5. 2014年度日本語カリキュラムの概要

CJLでは、2014年度に向けて「安定性」と「先進性」を2本の柱に据えた、日本語カリキュラムの整理、再編に着手しました。

「安定性」というのは、今後、外国人留学生の量や質に大きな変動があったとしても、高い質をもった授業を安定して提供できる土台を意味します。日本語カリキュラムの「安定性」は、CJLが全学におけるその責任を果たす上で、きわめて重要です。

「先進性」というのは、先進的、独創的でユニークな日本語授業、プログラム、カリキュラムを開発、提供していくことを意味します。これはすなわち、学内にとどまらず、広く国内外における日本語教育に向けて、CJLの活動成果を広く発信していこうという姿勢の表明でもあります。

このような「安定性」と「先進性」の具体として、2014年度から「総合科目群」「テーマ科目群」という二つの科目群を設定し、それぞれの中に個々の科目を位置づけました。

「総合科目群」の科目は、常勤インストラクターと非常勤インストラクターが担当します。あらかじめ策定された教材、シラバスに基づいて、日本語教育の専門家であるインストラクターが授業を担当することによって、同一レベルに複数のクラスを開講することができ、留学生数に大きな変動があっても、柔軟、かつ、安定した授業を提供することが可

能になります。

「テーマ科目群」の科目は、専任教員（任期付）、非常勤講師、兼任センター員が担当します。日本語教育学、および、その関連領域を専門とする教員が、自らの専門性を生かした教材、シラバスを策定することにより、先進的、独創的でユニークな授業実践を発信していくことができます。

このように「総合科目群」は主として「安定性」を、「テーマ科目群」は主として「先進性」を担いますが、それは単なる色合いの濃淡であり、どちらの科目群も「安定性」と「先進性」の両者を兼ね備えていることが前提となります。

これまで述べてきたことを概略したものが、表1です。

表1：2014年度日本語カリキュラム

科目群	科目（開講レベル）	授業担当
総合科目群 2014年度春学期開講予定 コマ数：356	総合日本語（1，2，3，4，5，6）， 集中日本語（1-2），短期日本語（1， 2，3，4），入門日本語，漢字（漢字 系）（1，2），漢字（非漢字系）（1，2）， 漢字（3，3-4，4-5），「日本語で 話そう1」「発音アクティビティ1- 2」「日本語でプレゼンテーション 3-4」等	常勤インストラクター，非常 勤インストラクター
テーマ科目群 2014年度春学期開講予定 コマ数：303	<読む><書く><話す><聴く> <文法><語彙><発音><漢字> <待遇表現><調べる><創作す る><考える><社会・文化><文 学><映画・ドラマ・演芸><生 活><仕事><自分><アカデミッ ク><理系>の20種類のキーワ ードを付して各科目を配置。	専任教員（任期付），非常勤 講師，兼任センター員

二つの科目群の中で展開される個々の科目の内容については、2013年度までと大きく変更はありませんが、特筆すべきこととしては、「総合科目群」の中に、「漢字」科目を新設したことがあります。

新設される「漢字」科目の概要は、表2の通りです。

表 2：2014 年度に新設される「漢字」科目

科目名（開講レベル）	開講クラス数
漢字（漢字系）（1）	4
漢字（漢字系）（2）	3
漢字（非漢字系）（1）	4
漢字（非漢字系）（2）	3
漢字（3）	5
漢字（3-4）	5
漢字（4-5）	5

「漢字」を扱う科目は、これまでずっと履修希望者が多かったにも関わらず、多くが「テーマ科目群」として開講されていたため、受け皿としての規模も充分でなく、学期や年度を越えた安定性という面でも、解決すべき点が多々ありました。そこで、2014 年度には「総合科目群」の中に、表 2 にある 7 種類の「漢字」科目（計 29 クラス）を新設し、「漢字を集中的に学びたい」という希望に安定的に応えられることを目指しました。

「安定性」と「先進性」を 2 本の柱に据えた、日本語カリキュラムの整理、再編は、5. で述べた一つめの課題である「日本語教育のグランドデザイン」の第一歩であると位置づけられます。

## 6. おわりに

本稿では、新たな一歩を踏み出した CJL の役割を確認し、CJL が取り組むべき課題として、「日本語教育のグランドデザイン」「『言葉の教育』に関する全学への発信、提案」の 2 点をあげました。そして、2014 年度の日本語カリキュラムについて、その概要を記しました。

しかし、CJL が解決すべき課題は、学生への対応だけではありません。CJL の活動は、約 200 名のティーチングスタッフによって支えられています。その一人ひとりの実践そのものが、CJL のみならず早稲田大学にとっても、貴重な財産です。留学生が「早稲田で日本語を学べて良かった」と思うのと同じように、ティーチングスタッフが「早稲田で日本語を教えて良かった」と思えること。そのような思いが実現する職場環境を、どう維持、改善していくのか。これもまた、CJL が取り組まなければいけない大きな課題の一つであることを記して、稿を閉じることにします。

（こばやし みな、早稲田大学国際学術院）

